市民大学「一　柿　塾」のご案内

２０１７．４．１
川　村　晃　生

「一柿塾」が六年目を迎えました。「一柿塾」は、住井すゑさんがご自宅で「抱樸舎」という市民大学を開設されたことを、訪れた住井邸でご息女からお聞きしたことが、ヒントになったのかもしれません。私は３０年近くにわたり、市民運動に携わってきましたが、市民が様々な知識を得ながら自ら理論を構築していく力を養う場が必要であることを痛感してきました。そして大学の退職を機に、大学の講座を市民に開放できるような場をつくりたいと思ってきました。

多彩な内容を提供したいと考えておりますので、ご聴講いただければ幸いです。なお、塾名は農民が柿を収穫する際に、枝に一つ残して鳥の食餌に供するという、人間と他の生物との共生を体現した日本人の美しく優しい思想に基くものです。

講座内容は裏面の通りです。

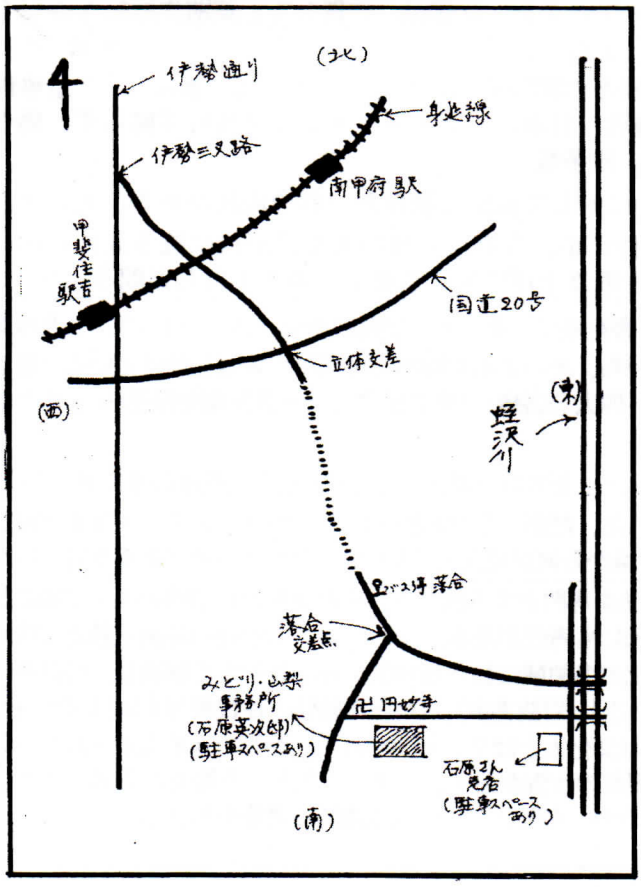
○**場所**　「みどり・山梨」事務所（下記地図参照）
（甲府市小曲町１２５５－２、石原英次氏邸内）

※駐車スペースに限りがありますので、できるだけ乗り合わせてお越しください。（バスは御所循環及び豊富行の「落合」停留所が近いのですが、土日は欠便のため不便です。）

○**参加費は会場運営費**（光熱費等）として２００円頂きます。（但し、各自の発意による支援カンパは有難く頂戴します。下記の口座をご利用ください。）

○湯茶の用意はありませんので、必要な方は各自ご持参ください。

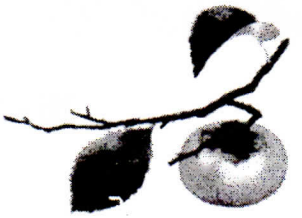
○事前予約は不要ですが、定員30名程度を考えています。（４０名まで入室可）



（連絡先）〒400－0014
甲府市古府中町984－2
（T／F）055－252－0288　川村晃生

郵便振替口座　00250－4－85431
口座名　　「一柿塾」

2017年度
「一柿塾」スケジュール



	日時	講師名／演題	①講師紹介／②講座内容
1	4月15日(土) 13:30～15:30（以下同じ）	五十嵐 敬喜 「辺野古とリニア ―行政訴訟の現実―」	① 法政大学名誉教授。弁護士。法律家の立場から公共事業、都市問題、憲法、行政訴訟など、多岐にわたって公正な社会への提言を続けている。最近は土地所有権をテーマとして、個別的な所有権から地域住民による「総有」への新しい理論を提言している。『美しい都市をつくる権利』（学芸出版社）、『現代総有論』（法政大学出版局）他、著書多数。 ② 辺野古の基地問題をめぐって、さまざまな訴訟が提起された。しかし圧倒的に国側が有利に展開した。それはなぜなのか。リニア問題も、行政訴訟に持ち込まれたが、はたして勝つ可能性はあるのか。行政訴訟の実態のあり方を問う。
2	6月17日(土)	小出 裕章 「廃炉への課題」	① 京都大学原子炉実験所に勤めて原子力研究の世界に身を置きながら、原子力に反対し続けてきた。それは期待を寄せて取り組んだ原子力や学問そのものへの選択の誤りに対し、自ら責任をとろうとしたからだと言う。著書に『放射能汚染の現実を越えて』（河出書房新社）『隠される原子力』（創史社）他。 ② 原発は危険だというだけではない。かりに安全に運転されたとしても、放射性廃物をふくむ廃炉という困難な問題がある。しかもそれは、技術的な問題の他に、廃物をめぐる住民感情や費用など多岐にわたる。まして大事故を起こしたフクシマの場合は―。
3	9月2日(土)	川村 晃生 「人はなぜ自然を壊してはいけないか」	① 慶応義塾大学名誉教授。「みどり・山梨」顧問。日本文学の研究から、人文学を現代社会に反映し得る方法論を模索して、環境人文学という新たな分野を構想中。著書に、『日本文学から「自然」を読む』（勉誠出版）、『壊れゆく景観』（共著・慶応義塾大学出版会）、『見え始めた終末』（三弥井書店）。 ② 自然破壊や環境破壊が叫ばれて久しい。事態は悪化する一方である。だがそれに抗して、自然を守ろうとする人たちも少なくない。いったいなぜ人は自然を壊してはいけないのだろうか。もちろん生命の存立が脅かされるからだが、はたしてそれだけなのだろうか。
4	10月21日(土)	田中 伸尚 「闇を翔ける希望 ―なぜ抵抗を書き続けるか」	① 朝日新聞記者をへて、ノンフィクション作家。一貫して、差別や抵抗を視点に日本の近現代を問い続け、天皇、日の丸・君が代問題や靖国にまで及ぶ。それは個人や良心の自由と国家との関係を考えることでもある。著書に『大逆事件 一死と生の群像』（岩波書店、日本エッセイスト・クラブ賞）、『飾らず、偽らず、欺かず』（岩波書店）、他多数。 ② 日本の近代史の中に、権力に対して抵抗し続けた一筋の流れがある。大逆事件はその中でも際立った事件だが、今日でも日の丸や君が代に抗う人たちがいる。そうした事件や人間を取り上げて書く意味を、書き手自らが問う。
5	12月9日(土)	まさの あつこ 「公共事業の現場から」	① ジャーナリスト。国会議員秘書を経て、東工大大学院に進学。博士（工学）。公共事業や環境問題に幅広い関心を持ち、その歪んだ現実を現場から発信し続けている。最近はリニアの取材も。著書に「四大公害病」（中公新書）、「水資源開発促進法 立法と公共事業」（筑地書館）など。 ② 民主党が「コンクリートから人へ」をスローガンとして打ち出し、政権の座に着いた時、公共事業の大転換が期待された。だが、今なお相変わらずのコンクリート事業が続いている。各地の公共事業の現場から何が見えてくるのか、そして背後にある本質とは？
6	2月17日(土)	椎名 慎太郎 「文化から山梨を考える」	① 山梨学院大学名誉教授。行政法を専門とする法学者。その立場から遺跡の保存問題に深く関わり、合わせて住民運動にも考察が及ぶ。またエフエム甲府の番組「教えて椎名先生」で、政治、環境、文化の多領域にわたる知識を分かりやすく解説し、好評を博す。著書に『遺跡保存を考える』（岩波書店）、『行政手続法と住民参加』（成文堂）、他。 ② 「山梨の文化とは？　あるいは文化人とは？」と聞かれて、即答できる人がどれくらいいるだろうか。歴史的にも現在の状況からも、山梨を文化という観点から考えると、どういう答えが 導き出せるのか。来県３５年になる講師が考察を加える。